荒川 洋治 評

文選 詩篇 (一)(二)

川合康三ほか訳注(岩波文庫・各1102円)

中国最古の詩文選集『文選』(五三〇年頃成立)のすべての詩作品を収録し、精細な訳注を付す。全六巻で構成。初の文庫。

『文選』は中国南北朝時代、南朝梁の昭明太子蕭統(即位前に三一歳で死去)が文人たちの協力を得て編纂。周代から秦、前漢・後漢、三国(魏・蜀・呉)、西晋、東晋、宋、南斉、梁代まで約一〇〇〇年間の詩文の精華を三〇巻に収める。以降、中国の詩文の規範となった。

「書は文集、文選」(枕草子)、「文は文選のあはれなる巻々、白氏文集」(徒然草)とあるように白楽天の『白氏文集』と並称され、王朝以後の日本文学にも大きな影響を与えた。文選読み(音読し、次に訓読)も生まれた。その中核となる詩篇は江戸期以降、漢詩の黄金期・唐代の詩(李白、杜甫ら)の陰になるが、そこには唐詩に先駆ける古代の詩情が息づく。以下一部新字で。

詩は、二三に分類。補」(中国最古の詩集『詩経』の亡失詩篇を承ける)、述徳(祖先の徳を称揚)、勧励(善行の奨励)、遊仙・招隠・反招隠(仙界への憧憬)、遊覧(自然の探勝)、哀傷(人の死)など人事、自然の全眺望が得られる。第一巻、詠史(歴史上の人物に自己を重ねる)の一首、曹植(一九二―二三二)の「三良詩」は殉死した子どもたち(三良)に思いをはせ、『黄鳥悲鳴/哀哀傷肺肝』(訳・黄鳥は彼らのために悲しげに啼く。ああ哀しいかな、胸が張り裂ける)と結ぶ。

唐詩に先駆ける古代詩の眺望

第二巻には、「竹林の七賢」が登場。俗世を離れ、竹林に集い、清談にふけった隠者たちだ。その嵇康、阮籍(二一〇―二六三)の「詠懐詩十七首」は、五言の連作詩。心の奥底にあるものを思らす詠懐詩の先蹤となる雄編。「夜中不能寐」から起こし「憂思獨傷心」で結ぶ第一連は、夜になっても眠ることができず、ひとり胸を痛めるようす。本書の補釈では「具体的に何を憂い悲しんでいるのか明言されず、憂愁の感情のみが純粋に形象化される」。詩はこのあと、男女の不意の別れ、同性愛の情景、秦の宰相李斯の最期、農夫になって瓜をつくった無位無官の幸福、支えあう動物たちの姿、神仙への欲求と再思、というように旋回。「一つの方向に収束するものではなく、千々に乱れる思いがそのまま繰り広げられる」。当時は、多くの詩人が非業の死を遂げた。阮籍も恐怖政治下で憤悩した。四方に視点を散らし、苦しみながら書き上げられた、強靭な詩である。

顔延之(三八四―四五〇)の詠史「五君詠五首」は『竹林の七賢』の主な哲人の個性を描きわける。阮籍(身を潜めても、見識は細緻)、嵇康(生まれながらの超俗の人。時の権力者にうとまれ処刑される)の次は、劉伶。彼は「酔情滅問見」(原文第二句)。訓読は「情を酔さて問見を滅す」。訳は「思いは内に秘め、外界を見るも聞くも断ち切った」。さらに補釈では、酒を愛するも、「外界を遮断し、内面に沈潜するための酒であったと、劉伶にとっての飲酒がもつ意味を説く」とする。

訳、語注だけではこの詩がどういうものか、この詩のどこに「詩」があるのかを十分に知ることはできない。本書では原文、訓読、訳、語注(とてもこまやかなもの)、押韻のあとに補釈。漢詩を知らない人もこの順序で詩の世界に近づくことができる。訳と補釈の「散文」をたよりに、これはこうなのか、それとも、というように少しずつ分け入る。それが『文選』を読む楽しさだ。詩のことばとそうではないことばとのかかわりを知る機会でもある。

なお「竹林の七賢」の七人は、世代のちがう人もいたので、全員がいっしょに会ったことはない。『文選』には、はるか彼方の人物をいつまでも思いつづけたり、とどまって考えてみたりなど、会ったこともない人を大切にする作品がとても多い。人びとは歴史から明かりをとって、現世を生きぬいたのだ。

魏晋南北朝時代(六朝期)は専制君主なき大分裂の時代だが、詩人陶淵明、書家の王羲之、画家の顧愷之らが現れ、文化への意識が高まった。「武力こそはたよるべき力であったと思われるにもかかわらず、武力をもたない文人貴族と知識人は、ついに武士階級の形成を許さなかった」(川勝義雄『魏晋南北朝』講談社学術文庫・二〇〇三)。貴族文化は、武力と対峙した。見識をもつ人が、人びとの最終的なよりどころになったのだ。そんな時代に、至宝『文選』は編まれた。この時代の人たちの生き方、見方には、いまも学ぶべきことが多いように思う。

『文選』詩篇は、漢代の民謡から生まれた五言詩がすでに主流だが、古来の四言詩も混在。詩型の上でも音調の上でも、自由度が高い。精選された唐詩にはない、いい景色がいくつもいくつも見せてくれる。それが最大の魅力だ。「百一」という詩の区分があることも本書で知った。人間と社会の諸相を批評するものだが、なぜ「百一」なのか定かではないらしい。『文選』で「百一」に属するのは、たった一首である。一つで生きる。生きていく。それも詩の姿だ。第三巻は、七月一八日刊行。陶淵明は第四巻から登場。

美術手帖 8月号

(美術出版社・1728円)

美術展の作品の前でパフォーマンスを行い、演劇空間に絵画や彫刻など展示的な要素を取り入れるそのような、演劇とパフォーマンス・アートのコラボは、ちょっとした話題になっている。

この新しい動きを「ポスト・パフォーマンス」と命名し、代表的な作家と作品を紹介し、その意味を解説するのが本特集のねらいだ。

大人の作家たちにインタビューし、独特の芸術表現の意図と方法や形式の必然性について生の声を聞き出す。そこで、浮かび上がってきたのは「美術」と「演劇」、「現実」と「虚構」の境界を横断することによる、芸術表現の新たな可能性の模索であり、従来の関係性の解体と既成概念の転覆による、未知の領域を開拓する意欲である。(毅)

MAGAZINE

昨日読んだ文庫

渋澤 健

私の本棚に何度も何度も読み返しているうちにカバーがヨレヨレでページの角がくたびれた文庫本がある。それは、私の高祖父である渋沢栄一の講演録『論語と算盤』(角川ソフィア文庫)である。

『論語と算盤』を初めて手に取ったのは40歳のときであった。外資系サラリーマン生活を経て会社を興すと決意したときに、約500社の会社設立に関与した「日本の資本主義の父」の考えが頼りになるかと思ったからだ。

「論語と算盤」とは道徳経済合一説である。初版は約100年前の1916年だ。初版の旧字体と比べると文庫本は読み易く編集してあるが、それでも一見、読みづらいと感じるかもしれない。しかし、その古びた言葉をかみ砕いて現在の文脈に置き換えてみると、そこに見えてくるエッセンスとは熱量ある未来志向である。「自分からこうしたいああしたいと奮励せよ」「もうこれで満足だという時は、すなわち衰えるときだ」「日々に新たにして、また日に新たなりは面白い」

「論語と算盤」とは倫理的資本主義という解釈が一般的だ。しかし、私が思うに栄一が「論語」と「算盤」を合わせて伝えたかった本質的なメッセージを今風に表現すると、それはサスティナビリティー(持続可能性)である。

算盤勘定ができなければサスティナビリティーは不可能だ。一方、算盤だけを見つめているとどこかのタイミングで足を滑らすかもしれない。また、世の中が著しく変化している最中で論語を読むだけでは持続性が乏しい。論語「と」算盤は、未来へと前進する車の両輪だ。見える範囲から物事を選別して処理する「か」の力では人間はAI(人工知能)に勝てない。一方、矛盾や無駄に満ちて見えないところから飛躍し、新たな価値を創造する「と」の力を持つべきだと栄一は唱えていたと考えている。これは、人間しか持てない力である。

10年前に企業の持続的な価値創造に長期投資する会社を設立した。私たちのミッションは「一人一人の未来を信じる力を合わせて、次の時代を共に拓く」という「と」の力だ。(コモンズ投信会長)

今週の執筆者

この3冊は埼玉大教授の一ノ瀬俊也さん。著書に『飛行機の戦争 1914―1945』など。大竹文雄さんは大阪大教授(労働経済学)▽若島正さんは京大名誉教授(米文学)▽橋爪大三郎さんは社会学者▽川本三郎さんは評論家▽荒川洋治さんは現代詩作家。「昨日読んだ文庫」の絵は舟橋全二さん。

小萩のかんざし いとま申して3

文藝春秋・2376円

著者 北村 薫さん

『いとま申して 「童話」の人びと』(2011年)『慶應本科と折口信夫 いとま申して2』(14年)に続く3部作の完結編。1992年に亡くなった著者の父が残した日記を基に、昭和前半の時代と人を丁寧に描き、深い感動を呼び起こす。

日記は大正13(1924)年、旧制中学在学の14歳から始まる10冊ほどの分量。手書き文字を読み解くのに10年。「やがて一つの世界が浮かんできた。物書きという仕事をしている私の前に、書き留めないと消えてしまうものがある。それを書き留めよという大いなる意思のようなものを感じました」

日記を基に織りなす人模様

第1巻は本と映画、歌舞伎に熱中し、雑誌『童話』を愛読して創作に手を染める青春時代。第2巻は西脇順三郎に学び、折口信夫に傾倒する慶応大学予科、本科時代。第3巻は大学は出たものの就職難が襲ってくる。父の歩みを縦軸に、同時代の資料を渉猟し、重層的に人の動きや時代相を描き出す。「さまざまな人間が浮かび、人と人とが向かい合い生きていくということの喜びと悲しみです」

こんな場所でこんな出会いがと、驚くようなシーンを随所で資料から明らかにしてみせる。例えば長谷川伸の芝居「一本刀土俵入」の初演時、父は見に行っている(第2巻)。長谷川はこの時、眼光鋭い人物と会ったという文章を残す。後にその人は満州映画協会理事長などを務めた甘粕正彦と知れる。「当時、甘粕が東京に来ていたことは事実だが、何をしていたかわからない時代の一幕」。まるで歴史ミステリーの一コマを見るかのよう。書物探偵・北村薫の視線を通して、各エピソードが生き生きと息づく。

第1巻は青春小説。第2巻は師である折口と折り合いの悪かった父が浮かび上がる。「愛するものに愛されないごくありふれた不幸せ」。第3巻はその折口と国文学者・橫山重の不和を書きながらそれぞれの人間像に迫るなど、多彩な趣向。第1巻の冒頭で、幼い頃に作家が会った忘れ得ぬ女性とは誰か。第2巻から十五代目市村羽左衛門がたびたび登場するのはなぜか。二つの小さなミステリーも、すべてが終幕につながっていく様は見事としかいいようがない。

「人と人が生み出す愛憎は、川のさまざまな流れが大海に注ぐがごとく時の果てには大きな許しとなる。書き手として大きな旅をしてきたという感慨がありました」

文・内藤麻里子 写真・根岸基弘

幕末維新改メ

中村彰彦著(講談社・1944円)

勇ましい勝者は素直に讃えられる。だが、敗者の勇敢さは切なく忍びない。「日本の夜明け」としての幕末維新は西日本の人々には嬉々として迎えられるが、東日本ではどこか戸惑いが感じられる。

最後まで幕府に殉じた会津藩は言うまでもなく、長岡藩、仙台藩、二本松藩、桑名藩、棚倉藩、盛岡藩、庄内藩、米沢藩などは封土削減の憂き目をみる。それでも旧領にとどまれる藩はましな方であり、会津藩はほぼ九割削減のうえ陸奥斗南藩(現青森県東部)三万石に移住という酷薄そのものであった。

長岡藩家老の河井継之助の下で大隊長をつとめていた山本帯刀は、新政府軍の兵士に捕らえられ、降参して官軍への参加を勧められたという。だが、「薩侯からは戦えといわれたが降参せよとはいわれなかった」と答えて潔く斬られた。享年二十二で家名断絶。しかし、大正十四年、山本家は海軍大学を修了した青年によって再興されたが、彼はのちに連合艦隊司令長官となる山本五十六である。河井もまた世を去る前に「八十里こしぬけ武士の越す峠」と自嘲して詠んだ。敗者の悲哀が突き刺さる。(凌)

あること、ないこと

吉田篤弘著(平凡社・1944円)

闇の奥から、悲しげな目でこちらを見つめる夜猫たち。深夜の焼きそば屋で語り合うのは、他の惑星から来た友人……。明確なストーリーが展開するわけではない。小説のようであり、エッセーのようであり、詩のようでもある。

事典の執筆者や探偵、さらに著者とおぼしき人物などが、次々に現れては「あること、ないこと」と戯れる。奇想天外なようでいて、銭湯や古書店、コーヒーといった舞台装置にそこはかとない幸福感が漂う。

デザイナーでもある著者は、その自由な言葉の連なりを、多彩にデザインして一冊に仕立てた。短編小説めいた文章の合間に、事典のごとく項目が立った短文が並ぶ。あちらこちらに潜む仕掛けを探すのも楽しい。

著者の視線は、常に世界の中心から外れた場所に向いている。気づけば、読むこちらも「世界からはみ出している感触」に心地よく酔っている。実験的かと思いきや、読む喜びの王道が味わえる本だ。

結末らしきものはない。冒頭、「あの灯りがついているところまで行こう」と著者は言う。その先に何があるのか。著者の歩みは続く。(晴)

中国人おもてなしの必読書

病院で困らないための日中英対訳 医学実用辞典 ●十六年続いたロングセラーの最新版 ●病院の全てのシーンで使える会話集 ●病名・病状・身体の用語集と詳細図 松本洋子編 2500円

日本の「仕事の鬼」と中国の〈酒鬼〉 漢字を介してみる日本と中国の文化 冨田昌宏著 1800円

AERA等絶賛!! 日本語と中国語の妖しい関係 中国語を変えた日本の英知 松浦晋二著 1800円

日本語と中国語の落し穴 ビジネス・生活で役に立つ一〇〇編を厳選! 久佐賀義光著 1900円

円満字二郎先生鑑定! 中国漢字を読み解く 簡体字・ピンイン もらくらく 前田晃著 1800円

中国人旅行者のみなさまへ 日本人からのメッセージ 日中対訳 殷躍中編 1900円

日中文化DNA解読 朝日新聞社 日中文化DNA解読研究会の研究から 2600円 北京大学教授 尚会鵬著 日本女子大学教授 谷中信一訳

日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性 李徳全 石川好監修 程麻・林振江著 林光江・古市雅子訳 戦後初の中国代表団を率いて訪日し、戦犯とされた一〇〇〇人前後の日本人を無事帰国させた中国の女傑。日中国交正常化一八年も前の知られざる秘話を初刊行 1800円

読売・毎日・東京・文藝春秋ほか 各種メディアで話題

出版の夢、実現へ 無料出版相談会 7月21日(土)午後1時〜 西池袋 詳しくは http://duan.jp/721.htm

●編集者募集中!● http://duan.jp/job

好評発売中

中国の改革開放四〇年の歴史を知る上の必読書 中兼和津次・淡輪敏・西出徹雄ら推薦 東京大学名誉教授 中国工業化の歴史 三井化学社会科学研究所 峰毅著 3600円

毛沢東時代(1949-1976) 橋爪大三郎氏の書評(1/14毎日)で大反響!! 中国屈指の経済学者が確かなデータと方法論を駆使して新中国の政治経済史を徹底解剖 中国政治経済史論 東京大学経済学博士 胡鞍鋼著 日中翻訳学院訳 16000円

好評シリーズ最新版 必読! いま中国が面白い vol.12 シェア経済・キャッシュレス社会・コンテンツ産業の拡大…… NHK、朝日、毎日新聞などが取り上げた好評シリーズ 一年分の人民日報から中国のいまを知るための重要記事を厳選し収録 いま中国の真実は 而立会訳 三潴正道監訳 1900円

「ことづくりの国」日本へ 関口知宏著 「目から鱗がおちる思いだ」——加藤青延 NHK解説委員 NHK「中国鉄道大紀行」の旅を通じて得た驚くべき世界観! ——そのための「喜怒哀楽」世界地図 1600円

[第13回]受賞作記念 日本人に伝えたい 中国の新しい魅力 福田元総理も応援! 中国人の日本語作文コンクール 編

[第12回] 訪日中国人、「爆買い」以外にできること

[第11回] なんでそうなるの?—中国の若者は日本のここが理解できない

中国若者たちの生の声シリーズ 殷躍中編 各2000円 (第1〜13巻)

中国人ブロガー22人の「ありのまま」体験記 来た! 見た! 感じた!! ナゾの国 おどろきの国 でも気になる国 日本 中国人気ブロガー招へいプロジェクトチーム編 日中翻訳学院 関亜由紀子訳 2400円

中日対照言語学概論 その発想と表現 中日両言語の違いを知り互いを理解するための一助となる言語学概論 大東文化大学名誉教授 高橋弥守彦著 3600円

発刊記念 中文日訳公開セミナー 7月21日(土) 午後2時〜 西池袋 日中翻訳学院高橋塾第一期の総評、日中出版翻訳の最前線に生で触れられるチャンス! 「出版翻訳のプロ」を目指す多くの受講生たちとの実際の交流も。 詳しくは http://fanyi.duan.jp/

日中翻訳学院 日本最高峰の出版翻訳専門学院を目指し、約300人のプロ翻訳者を輩出!

※表示価格はすべて税別です

日本僑報社 〒171-0021 豊島区西池袋3-17-15 Tel. 03-5956-2808 Fax. 03-5956-2809 info@duan.jp The Duan Press http://jp.duan.jp/ 出版翻訳専門の日中翻訳学院 おかげさまで10周年